

I S S N 0289—9302

TOYO UNIVERSITY LIBRARY INFORMATION BULLETIN

# ΚΟΣΜΟΣ

コスモス No.96 1992 冬

特集

コンビニエンス — AV —



加藤 千亜紀さん画 (短大・日本文学専攻1年)

## 特集

# コンビニエンス— AV —

あけましておめでとうございます。新年早々の「コンビニエンスシリーズ」第3弾は、AV!!

— 今回も4人の方々にそれぞれの『AV』論を語ってもらいました。

間もなく学年末試験が始まりますが、それまでのひととき、AVの活用で気分リフレッシュ!!

## 異次元トリップ

桑原 文子

図書館のAV室で映画を見ていると時のたつのも、そこがどこであるのかもすっかり忘れてしまう。アメリカの図書館で映画を見た後、そこがアメリカであることに気付いて大変に驚いた記憶がある。映画に徐々に引き込まれていくのは、眠りに落ちるときに似ているように思う。いつか分からないうちに夢中になって、気が付けば時が過ぎている。虚構の渦巻く暗やみの世界から、現実の明るさに急に戻るときの気分はなんともいえない。私にとって映画を見ることは、異次元への手軽なトリップであり、その発着場所となるAV室は、大学の中でもっとも好きな場所のひとつである。

戯曲を読むこととその芝居の上演を見ることは全く別の体験であり、また舞台と映画も別なものである。戯曲と舞台は相互補完の関係で、舞台化によって作品の持つ思わぬ劇

的な効果を発見したり、また戯曲を読んで台詞の細部の理解が深まったりする。ところが好きな戯曲や舞台の映画化されたものを見ると大抵の場合、がっかりする。映画の幅広い観客層に合わせて、作品を説明し過ぎたり、単純化し過ぎたりするためらしい。ピーター・シェファアの「アマデウス」はその例外である。原作の戯曲よりも、舞台よりも映画の方が素晴らしいと思う。シェファア自身が書き直した映画の脚本は、戯曲よりもドラマティックである。そしてバックに流れる音楽の見事さ。この映画はいつどの部分を見ても楽しめる。こういう映画に出逢うと嬉しくなる。皆さんはどんな映画がお好きだろうか。まだ図書館のAV室を利用したことのない方は、ぜひ試していただきたい。大学に来る楽しみがひとつ増えること請け合いである。

(文学部助教授 くわはら・あやこ)



## 蓄音機から レーザーカラオケへ

竹下 安雄

「この中にこびとが入っていて、それが歌っているんだ」

近所の新しがり屋の青年が2～3人の子供達を前にして吹聴した。そばには木製の箱に入った手回し式蓄音機があり、そこから何かの歌謡曲が流れていた。私の幼少の時であるから、昭和20年代前半の頃であろう。私は、その青年の言葉を半信半疑で聞きながら、初めてレコード音楽と出会ったのである。

それから数年経って、今度は私の兄が小遣い金を全部はたいてデンチク（電気蓄音機）なるものを手に入れた。そして当時流行った映画音楽の「駅馬車」やベニー・グッドマンの「メモリー・オブ・ユー」など同じ曲を何度も聞かせてくれた。そのころのレコード針は鉄針で、兄から「1曲毎に針を取り替えないと、レコードが痛むからナ」と使用上の注意を受けた。にもかかわらず、面倒くさがり屋の私は、針を取り替えずに何度も何度もレコードの溝がすり減るまで音楽に耳を傾けていた。「駅馬車」はまさにザアザアと大雨の中を疾走するがごとくであったことは、言うまでもない。

あれから約40年経った現在、当時想像もしなかった「絵の出るレコード」と銘うったレーザー・ディスクなるものを、今度は私が手に入れた。それなりに、LDプレーヤーだの、やれテレビだとかアンプやスピーカー等も新しく揃えていったら、居間が視聴覚室まがいのようになってしまった。手持ちソフトの中では、イ・ムジチ合奏団の「四季」を挿入した「尾瀬」（日本コロムビア発売）や、高度

1万フィートから日本列島を縦断して空撮した「日本」（ポニー発売）などのBGMものが気に入っている。ごく最近、レーザーカラオケのソフトを入れてみたら、親類や友人、そして近所の主婦や家族の友達がやってきてけっこう利用している。芸術の香り高き自称・視聴覚室は、いまではアルコールの匂いが充満するカラオケ・ルームとなり果てようとしている今日この頃である。

（情報システム室 たけした・やすお）

## 「サラサーテの盤」

亀田 達也

「宵の口は閉め切った雨戸を外から叩く様にがたがた云はしてゐた風がいつの間にか止んで、気がついて見ると家のまはりに何の物音もしない。しんしんと静まり返った儘、もつと静かな所へ次第に沈み込んで行く様な気配である。机に肘を突いて何を考えてみると云ふ事もない。纏まりのない事に頭の中が段段鋭くなつて気持が澄んで来る様で、しかし目蓋は重たい。座つてゐる頭の上の屋根の棟の天辺で小さな固い音がした。瓦の上を小石が転がってゐると思つた。ころころと云ふ音が次第に速くなつて廂に近づいた瞬間、はつとして身ふるひがした。廂を沁つて庭の土に落ちたと思つたら、落ちた音を聞くか聞かないかに総身の毛が一本立ちになる様な気がした。気を落ちつけてゐたが、座のまはりが引き締まる様でちつとしてゐられないから起つて茶の間へ行かうとした。物音を聞いて向うから襖を開けた家内が、あつと云つた。

『まつさをな顔をして、どうしたのです』」

内田百閒「サラサーテの盤」の冒頭である。百閒は私の大好きな作家の一人だが、彼との

出合いに図書館が大きな役割を果たしている。1981年冬のある日、大学図書館で催された映画会に何気なく立ち寄ってみた。上映作品は、鈴木清順監督「ツィゴイネルワイゼン」。この作品は、鈴木監督を再登場させたフィルムとしても映画ファンの間で記憶されているが、その下敷になっているのが「サラサーテの盤」である。翌日早朝から私は図書館にこもり、百閒という作家の探索を始めた。私にとって百閒の文章は、視覚・聴覚・嗅覚を含め、五感全体に訴えてくるような印象をいつも与える。マルチ・メディア的と言えるかもしれない。図書館の映画上映会をきっかけにした百閒との出合いは、この意味でも、何か因縁めいている。

(社会学部講師 かめだ・たつや)

## 学習とマンガ・ブーム

税所 篤郎

学習と視聴覚ということばから、最近のマンガ・ブームを連想してしまう。朝夕の電車の中での学生諸君のマンガ熱中ぶりが、特に印象深いせいであろうか。実際、出版界のベストセラーは、数種のマンガ週刊誌であるといわれる。筆者が学生の頃には、それ程マンガは流行らず、GIと呼ばれた米軍兵士のマンガ本の愛読を不思議に思ったものである。しかし、今や来日外国人が日本の若者のマンガ熱に驚いたとか、ヨーロッパで日本のマンガTVが子供の価値観を変えてしまうとして社会問題化したなどと報じられる有様である。

視覚メディアとしてのマンガが、なぜかくも若者に絶大な人気をえているのであろうか。第1は、メディアとしてTVと図書の両方の長所を備えていることであろう。つまり、T

Vのように気楽に接し易く、内容が分り易い。しかも、図書のように自分の好きなものを、好きな時に選択できる。第2はその娯楽性で、主人公のロマンスやスリルが読者を引きつけて止まない。加えて「マンガ日本経済入門」の大ヒットなど、最近ではその学習的機能も注目されるようになり、小中学校では学習マンガが副読本としてすでに採用されているという。

しかし、マンガやVTRなどの視覚的学習方式が拡大して、将来伝統的な講義や輪読などの言語的方式にとって代われるようになるかということ、そうは思わない。映像的方式は、確かに情報を効率的、具体的に伝えることには優れているが、思想、概念、法則などの伝達は言語を使わなくては無理だからである。そこで、学生諸君の合理的な学習のためには、映像的方式と言語的方式を適宜に併用すること、また娯楽としてのマンガは図書学習の息抜きとしてほどほどに利用するように勤めたい。

(工学部教授 さいしょ・あつろう)

### 《表紙の絵》

外はシンシン、内はホカホカ。『幸福な王子』を読み始めたら、ボクの心の中まで幸せ気分でホッカホカ。

## 工学部分館にAV室オープン

かねてよりAV室の設置を強く要求してきましたが、諸般の事情が要求に先行し、利用者には大変ご不便をおかけしました。

この度、小規模ながら関係者のご協力により、ようやく10月23日より開室し、毎日多くの利用者でにぎわっています。

昨今の研究・教育・学習は、音声・映像からの授受が拡大し、メディア利用には、目を見張るものがあります。多種多様のソフトも作られ、多くのニーズに応えることができます。

勿論、分館では、難しいものばかりではなく、一般的な教養・娯楽作品も取り揃え、感性への刺激が知性を誘発し、それが学習への一助になるものと確信しています。

川越キャンパスは、敷地は広いものの、種々の制約の中でAV室確保に苦労しましたが、工学部創設30周年記念棟（4号館）の建設に伴い3号館1階を使用できることになりました。工学部分館とは15mぐらい離れていますが、併設とほぼ変わりありません。奮ってご利用ください。

このAV室には、最新のVTR対応4台、CD・カセット対応機器4台が設置され、16名が視聴できるようになっています。

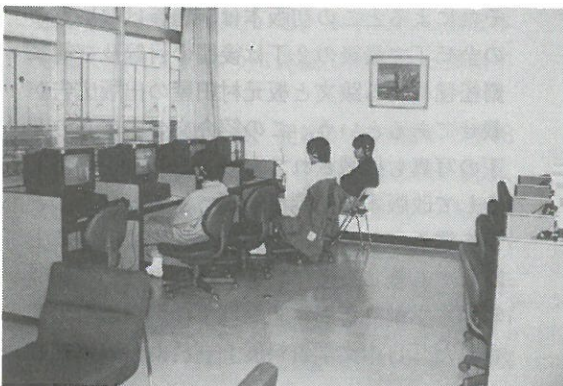
また、同室には軽読書コーナーも用意し、ブラウジングルーム的雰囲気をかもしだしています。

それでは、ソフトの一部を紹介しましょう。ビデオでは、「武器よさらば」「チャップリンの黄金狂時代」「ラグビー日本選手権」「Let's play Tennis」「ルーブル・美の回廊」「NHK大英博物館」「NHKシルクロード」「世界鉄道の旅」など名画や美術、スポーツ、海外旅行等々のソフトがあります。CDでは、「桑田佳祐の稲村ジェーン」「安全地帯」等のポピュラーやクラシックも種々取り揃えています。このところ、良く利用されているポピュラーは「カーペンターズ」「ANNICA」、クラシックは「ベートーヴェン」「モーツァルト」「ブラームス」等の交響曲全集です。

その他、コンピュータ関係のもの、カセットテープのドイツ語、英会話、科学工業関係のもの、企業紹介など多種あります。これからも逐次、資料を整備し、利用し易く改善していきますので、大いにご利用ください。

視聴覚室の利用時間は以下の通りです。

平日	9:10 ~ 16:30
土曜	9:10 ~ 12:30



— ゆったりとくつろ

ぎながらビデオに

見入る学生達 —

蔵書探訪 8 (貴重書解題)

## 東海道中膝栗毛

中山 尚夫

弥次郎兵衛、喜多八の滑稽な東海道の道中咄を描いた十返舎一九作の滑稽本『東海道中膝栗毛』は全8編と発端とが、享和2(1802)年から文化11(1814)年にかけて出版された。すなわち、

享和2年	初編	全1冊
3年	2編	上下2冊
4年(文化1)	3編	上下2冊
文化2年	4編	上下2冊
3年	5編	上下追加3冊
4年	6編	上下2冊
5年	7編	上下2冊
6年	8編	上中下3冊
11年	発端	1冊

である。初編出版当時は東海道全部を書き継ぐ確たる予定はなく、とりあえず日本橋から箱根までの滑稽譚のみを書くつもりであったようだ。しかし、主人公2人の小悪党でありながら間抜けでおっちょこちょいな小市民的人物像と読者の旅ごころを誘う趣向や狂歌本的要素等が要因であったのであろうか、この1冊は大流行して続編を生み、以後は大ベストセラーとしてついには伊勢神宮を経由して大坂にいたる8編まで書き継がれることになったのである。そして、この流行のおかげで主人公の2人はさらに旅を続けることになり、金比羅詣から木曾街道、善光寺、草津温泉を経て文政5(1822)年、21年目にしようやく江戸に戻ったのである。つまりこの間の2人の滑稽譚は『続膝栗毛』として出版され続け12編で完結するまで、正統合わせて21編の「膝栗毛」が出されたということになる。こ

のことは、この作品と作者である十返舎一九とがいかに江戸時代後期のこうした戯作の主たる読者層である町人たちからもてはやされたかを物語り、以降も今日に至るまでこの作品は、多くのいわゆる「膝栗毛もの」と称する亜流作品を生み、日本文学史上代表的江戸庶民文学の一つとなった。

こうしたベストセラー作品であるから、『膝栗毛』は初版初刷本のみならず初版後刷本、重版本が何度も出され読者の需要に応じた。本学図書館蔵の『膝栗毛』も重版本の一冊である。

では、『膝栗毛』の諸本にはどれだけの種類があって本学の蔵本はそれらのどこに位置するものであるか、ということであるが、実はこの諸本調査はまだ不十分であって正確なことは不明としかいいようがないが、現時点において判っていることを以下に延べることとする。

『膝栗毛』各編の初版初刷本が一時に出版されたものでないことは、各編の刊年が違うのであるから言うまでもない。中村幸彦氏によれば確認できる初版初刷は平戸市松浦史料館の発端のみで他編は初編を除いて同館蔵本にしろ同氏蔵本にしろ初版ながら初刷ではないとされる。これらが小学館の日本古典文学全集『東海道中膝栗毛』の底本である。しかるに近時、市古夏生氏が初編の初版(初刷との確証はないが、刷りはほぼ良好とのこと)本を紹介された(「書誌学月報17」青裳堂刊)。それによるとこの初版本は、題簽はないものの全45丁で最後の2丁は後編の目録及び龍鱗齋松毬による跋文と板元村田屋の出版広告が載せてあるという。この紹介文の中にこの2丁の写真も掲載されており、その内容・書体、そして改版本の初編は43丁であるということ等を鑑みてこの初編を初版の初刷に近い本と断じても差し支えないようだ。また、昭和62年の本学創立百周年記念行事の一環として催された「日本文学資料展」(於丸善)に初刷

ではないものの初版本が初編から5編までまとめて出品された(某氏蔵)。この本は滑稽本の通常の大きさ(中本)と異なり半紙本型である。貸本屋用に特別誂えされたものである。このようにみると、初編から発端にいたるまで初版本は現存するが、初刷となると発端のみしか確認できない。

改版本はどうであろうか。初版本の8編下の巻末に板元村田屋による「道中膝栗毛初編 来午再版 原板ことの外摺つぶし候故再板仕候ニ付作者又々相考發端一冊あらたに書加へ全二冊となしし出シ申候不相替御求御高覧可被下候」という広告がある。初編の初版は刷りを重ねて板木が摩滅してしまったので来午再版本を出す予定だ、その時に発端も加えよう、というものである。結局、発端の出版はさらに遅れることとなったが、再版本についてはこの記述のとおり文化7年正月に初編から8編まで一括して出た。この再版本が初版本と異なる所は、各編各冊の表紙・題簽、見返し題が無い、編により凡例・目録・口絵等がない、巻末の出版広告等がない、などが一見して判る点である。この後の重版本は、文化7年の再版を真似たようだが総て同じというわけではない。本学の重版本は再版本と比較して、①2編の凡例がない②3編の凡例・口絵がない③5編の口絵・附言併凡例がない④5編後序がない⑤5編追加の附言がない⑥6編の口絵・附言併凡例がない⑦8編の口絵(2図)がない、というふうに各編共序文と本文以外は削除している。本学以外の重版本もおそらくこのような体裁であろうと推測する。

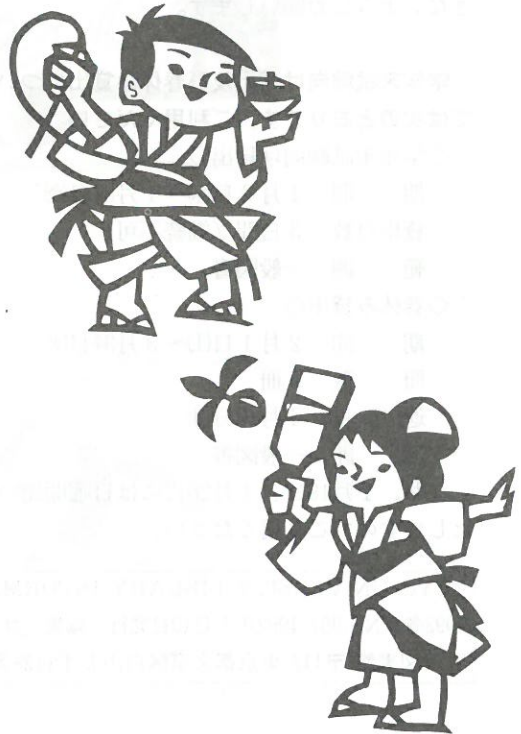
さて、本学蔵本は、発端から8編まで全18冊、各冊縦18cm横12cm、表紙は各冊肌色無地、紙屋利助板。刊年の記載なし。刷りの状態は同一本の中でも丁によって良不良一定しないが板木の摩滅ぶりはうかがえる。料紙は薄手で上等とは言えない。板元の紙屋利助は江戸本所相生町の書林で『続膝栗毛』9編(文政

2年)の初版の板元であるから作者の一九とは親しかったものと思われる。こうした縁で『膝栗毛』の重版本を出したものと推測する。また彼は『続膝栗毛』の重版本も出しており、正統一括して重版したことが考えられる。だとすれば刊年は、『続膝栗毛』が完結したのが文政5年であるから早くとも文政6年以降ということになる。滑稽本の大きさは縦18~18.5cm、横12~13cmほどの中本と呼ばれる型で、大型のものは初版初刷かそれに近く、小型のものは再版以降のものである。そうした書型の上からも本書は重版本の特徴をよく表している。

なお、『膝栗毛』の伝本の中には、たとえば文久2(1862)年に出版された『滑稽五十三驛』(内題)のように改題、改編、一部改作された改版本もあるし、合巻本化されたダイジェスト版も多くある。

〈K913.55 : JI : 10〉

(文学部講師 なかやま・ひさお)



## 図書館 あ・ら・かると

### ★ 白山 見て見て聞いて ★

#### 秋のガイダンス報告

去る10月21日(月)～11月8日(金)に、卒論、ゼミ論作成のための、文献探索案内を行いました。数名の教員の方を含め、130名の方々に参加していただきました。

4月、5月の図書館ツアー、ガイダンスの参加者を合わせると、昨年に比べ、4倍の人数になり、企画した甲斐がありました。今後も、役に立つガイダンスを心がけたいと思いますので、ご要望、ご意見等お寄せください。

#### 入庫者が急増!!

閉架書庫への入庫者がことは急増しています。昨年に比べ、11月現在で約3割増となっています。ただし、図書は他の人も利用しますので、入庫した場合は、図書の配列をみださないようにお願いします。

学年末試験向け貸出及び春休み貸出については次のとおりです。ご利用ください。

#### ◇学年末試験向け貸出◇

期 間 1月9日(木)～1月31日(金)

貸出日数 3日間(継続不可)

範 囲 一般図書

#### ◇春休み貸出◇

期 間 2月1日(土)～3月31日(火)

冊 数 5冊

返 却 日 4月13日(月)

範 囲 一般図書

なお、1月19日、1月26日には日曜開館いたしますのでご利用ください。

### ★ 朝霞 見て見て聞いて ★

朝霞分館学年末試験に伴う開館時間変更等のお知らせ

後期試験に伴い次の様に変更になります。

期 間 : 1月13日(月)～2月5日(水)

開館時間 : 平日 9:00～19:15

土曜 9:00～16:45

日曜及祭日の15日、19日、26日は、  
10:00～17:45です。

なお1月9日～2月5日は貸出停止期間です。詳細は、パンフ、提示等をご覧ください。

### ★ 工学部 見て見て聞いて ★

工学部では、初めての試みとして7月の前期試験期に、開館時間延長と日曜開館を行い利用者も平日100名強、日曜日200名強と好評でした。今回の後期試験も更なるサービスを考え、下記の通り開館時間の延長を実施いたします。どうぞ、ご利用ください。

期 間 : 1月13日(月)～1月27日(月)

開館時間 : 平日 9:10～19:00

: 土曜 9:10～16:00

日曜及祭日の15日、19日、26日は  
10:00～16:00です。

なお、詳細については、掲示をご覧ください。

### ★編集後記★

あけましておめでとうございます。今回の特集はAV。これを機にいっそうAVに慣れ親しんでいただくよう願っています。本年もどうぞよろしく。

#### 返却期限を守ってください!

学年末試験終了後、『機械化』の準備を行います。貸りている図書・雑誌は期限内に必ず返却してください。ご協力をお願いします。

TOYO UNIVERSITY LIBRARY INFORMATION BULLETIN **KOSMOS**

1992冬 (No.96) 1992年1月10日発行 編集:コスモス編集委員会 発行人:山崎正巳 発行所:東洋大学  
附属図書館 〒112 東京都文京区白山5丁目28番20号 Tel. 03(3945)7314 ©東洋大学附属図書館 1992